インフュージョン型授業が児童生徒の批判的思考態度に与える影響

○重枝孝明[1]・宮木秀雄[2]・沖林洋平[2]
([1]山口大学教育学部附属山口小学校・[2]山口大学教育学部)

問題と目的

山口大学教育学部附属山口小学校では，子どもが学びの中で無自覚であった価値（汎用性のある力）を自覚し，他の場面や文脈においても活用できるのかを考えたり実践したりすることで，これらを自在に使いこなすことができるようにすることをねらいとする研究を進めている。研究推進にあたって,「創る科」という新教科を創設した。「創る科」は,「具体化・抽象化する力」や「比較する力」といった，各教科等で概ね育成が見込め，汎用性が高いと考えられる 14 つの力を直接的に育成する教科である。「創る科」で，子どもたちの無自覚であった価値の自覚化を促し，各教科等の学びの中で自在に使いこなすことで，より豊かに学ぶことができるようにすることをねらっている。

本研究では，それらの価値の中から，日常や学習における様々な場面で発揮される「批判的思考力」を取り上げた。批判的思考態度(平山・楠見, 2004)の証拠の重視に関わる学習活動が行われた。

方　法

調査時期　調査は 2020 年 8 月から 10 月にかけて 3 回実施された。

調査参加者　山口大学教育学部附属山口小学校 5 年 1 組の 33 名が調査参加者であった。

調査項目　批判的思考態度尺度(平山・楠見, 2004)をもとに，小学生にも回答可能と考える 6 項目を作成した。調査項目は，大学教員と附属学校教員 3 名で合議を行って作成した。調査で用いた項目を Table1 に示す。あてはまらない，から，あてはまる，の 4 件法であった。

結果と考察

授業回と項目の評定値の関係を検討した。項目 3 で授業回の有意な主効果が見られた($F(2,64)=4.41$, $p<.05$)。主効果が有意であったため下位検定を実施した結果，1 回目が 2，3 回目よりも低かった(MSe=0.147, $p<.05$)。Table1 の項目 4, 5, 6 は自分と異なる意見を尊重すること, 項目 1, 2，3 は証拠の重視に関わっている。そこで，項目 4，5，6 と 1，2，3 の平均評定値を算出し，授業回による変化を検討した。その結果，項目群と授業回それぞれの主効果は有意であった($F(2,64)=4.25$, $p<.05$; $F(1,32)=50.09$, $p<.01$)が交互作用は有意ではなかった($F(2,64)=1.26$, ns)。

研究授業では,「コロナ禍において楽しく学ぶためにどうするかを考える」が学習目標であり，第 1 次ではデータや根拠に基づいて考えることの有用性に気づくことがテーマであったため，項目 3 の評定値が有意に高まったと考えられる。また，附属山口小学校では日常的に多様な意見の受容を経験する活動を行っている。そのため，1 回目の調査で，他者の意見を聞く項目が証拠の重視に関わる項目よりも高かったと考えられる。

Table1　本研究の項目と基本統計量

	項目内容	1 回目		2 回目		3 回目	
		ave	SD	ave	SD	ave	SD
1	自分の考えとは違う考えの証拠はないかということをしっかり考える	3.03	0.74	3.13	0.61	3.13	0.61
2	判断をするときには，できるだけ多くの事実や証拠を調べる	3.38	0.61	3.44	0.76	3.44	0.76
3	はっきりとした根拠にもとづいて行動する	3.19	0.59	3.41	0.56	3.41	0.56
4	たとえ自分と意見の合わない人の話であってもしっかり聞くことができる	3.78	0.42	3.78	0.42	3.78	0.42
5	他の人の良い意見や考えを受け入れることができる	3.78	0.55	3.84	0.37	3.84	0.37
6	人の考え方には自分の考え以外の様々な考え方があると思っている	3.81	0.40	3.91	0.30	3.91	0.30